

高大接続のための学力 把握をめぐるって

1

2012年3月31日

名古屋大学第2回公開研究会

北星学園大学 佐々木隆生

高大接続のための学力把握と学力入試

- 日本型高大接続－教育上の接続に必要な学力把握を「落第試験」である選抜試験に依存－がもつ根底的な問題把握を前提に考える必要性。
- 高等教育機会の不足と学力入試の選抜機能維持、高校での「普通教育の完成」、それに大学での適切な学力試験作成可能性・・・これらによって支えられてきた日本型高大接続は機能不全となっている。⇒入試に依存した高校教育へのBackwash Effectは期待できない。
- 必要なのは入試改革ではない。高大接続に必要な教育改革の一環としての高校段階での学力把握の確立であり、それに基づく選抜制度再構築である。

現在の学力入試の問題点

- 学力試験＝「落第試験」であることから生じる問題：「公平・公正な序列化」と適切な得点分布が優先⇔教育上有効な出題への限界、「良問」が序列化・差別化機能をもたない限界。
- 学力試験が1回限りの古典的な「素(粗)点」主義に基づく評価を行っていることから生じる問題＝達成度評価の困難：素点の不安定性、達成度の母集団への依存と難易度への依存、科目・問題間の相違の未解決。
- 学力試験の機能不全から生じる問題：志願倍率低下による得点差の意味の変容、出題教科・科目の少数化とパターンの激増。
- 集団準拠の問題：偏差値の過度の重視と達成度の軽視。

大学入試センター試験の意義

- 大学入試センター試験は、「普通教育」を前提とした入試を支える基盤となっている。⇒センター試験と国大協の「5教科7科目」がなければどうなっていたか：日本型高大接続の機能崩壊。
- 「難問・奇問」を排除した基準的な学力把握の維持を可能としている。⇒共通一次前の状況を忘れてはならない（日本型接続入試で行う記述試験の限界）。
- センター試験によって、記述型個別試験、小論文入試などが可能となっている。

大学入試センター試験の限界

- ①集団準拠の選抜資料提供から生まれる限界。
- ②古典的テストの限界：達成度を測ること、複数回実施などの困難。
- ③ア・ラ・カルト方式の限界：「普通教育の完成」とは無縁。選抜に従属。

【センター試験の問題点は日本型高大接続の機能不全の一環をなしている。】

マークシート方式の意義と限界

- マークシート方式によって、客観的評価や基礎的知識の達成度をみることが可能となっている。
- マークシート方式の改善の可能性⇒論理的思考・判断力・表現力などの一部はIRTに基づくCBTの導入によって可能。
- マークシート方式のテストのみで学力をすべて測ることはできない⇒本来は、記述試験、面接、活動記録、高校GPAなどと組み合わせて利用するのが適切。



- 問題は日本型高大接続の中でのセンター試験の性格にある。

記述型試験は可能か

- 共通第一次学力試験以前の国立大学型記述試験やバカロレア型記述試験は可能か？
 - ・高校多様化とユニバーサル段階への対応に限界
 - ・問題作成・採点はごく一部の大学を除いて不可能
- 個別大学の学力試験であれば、センターが問題を作成して記述回答をさせ、個別大学がそれぞれに採点・評価を行うこともありうる(統一型記述試験)。だが、達成度評価に基づく高大接続には適用困難。
- 全国的な記述型達成度試験では、同一基準に基づく評価が不可能。

⇒①エリート段階の試験の普遍化は可能か、②実行可能性はあるのか⇒日本型接続の転換から見る必要。

教育接続に必要な学力把握とは何か

- 学力がacademic achievementであることの確認－試験・テストで測ることが可能な学力。問題は、そうした試験それ自体ではなく、そうした試験の利用方法にある。
- 可能な限り論理的思考力・判断力・表現力などを測ることは学力測定を構成－「マークシート方式だからダメ」とは言えない(IRTによる開発可能性や教科・科目ごとに適切な学力標準作成などを視野に入れる必要性)。
- 学力の一定部分や「学力を超える学力」などは、試験・テスト以外の方法に基づくのが適切:すべてを試験・テストに盛り込むことの問題を直視する必要性。

改革に必要な視点

- 日本型高大接続を転換する意識のない改革は、①教育接続を置き去りにした入試改革に落ち込み、②高大接続と高校教育の全体の改革の障害となる。
- 目的合理性・実行可能性・社会的受容可能性のいずれを欠いても改革は実現しえない。
- 高校・大学関係者が、自らの責任で改革に協力して向かう集合的営為が必要。
- 高大接続は公共的課題であって、個別の高校・大学の利益の積み重ねではできない。

最後に

- 日本型高大接続を維持したままでは、「痩せ衰える大学教育」と「底が抜ける高校教育」が支配的となる。
- 一部の難関大学と進学高校だけでは知的基盤社会は維持しえないし、それら自体、「教育の荒蕪地」の中では育たない。
- 高大接続テストを基盤に、一方では中高接続改革、他方では大学入試制度改革と大学教育改革を進めるべきである。
- すべての諸条件の改革を提唱して(=高大接続テストへの「ないものねだり」的批判)、日本型高大接続の転換を遅らせることは合理的ではない。